

夜の繁華街の特性と来訪者の活動実態と意識

菅野 健¹・大森 宣暁²・長田 哲平³

¹学生会員 宇都宮大学 大学院工学研究科 (〒321-8585 栃木県宇都宮市陽東7-1-2)

E-mail: mt176426@cc.utsunomiya-u.ac.jp

²正会員 宇都宮大学教授 地域デザイン科学部 (〒321-8585 栃木県宇都宮市陽東7-1-2)

E-mail: nobuaki@cc.utsunomiya-u.ac.jp

³正会員 宇都宮大学助教 地域デザイン科学部 (〒321-8585 栃木県宇都宮市陽東7-1-2)

E-mail: osada-teppej@cc.utsunomiya-u.ac.jp

近年、ライフスタイルの変化を背景に、人々の生活の質や満足度を向上させる要因として余暇に注目が集まっている。その中でも近年、特に注目の集まっているナイトタイムエコノミーに着目し、栃木県宇都宮市をケーススタディに繁華街がどのように発展・衰退していったかを周辺の環境等から考察した。さらに、現存する3つの繁華街において、夜間の繁華街来訪者に対するインタビューおよびアンケート調査を行うことで、飲酒活動の実態や衰退傾向にある繁華街に対するイメージ等を把握した。各繁華街はそれぞれに異なる特徴を持っており、各々の機能を求めた回遊も確認できた。アンケート調査から確認できた衰退傾向の繁華街の情報発信不足という課題に対して、HPの作成を行い自治会関係者等に閲覧してもらうことで、有効な情報発信に向けた意見が得られた。

Key Words : *leisure activities, night-time economy, downtown*

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

近年、我が国では所得・収入、仕事の充実よりも余暇時間やレジャーに使う時間の充実を重視する人が増えている。例えば、内閣府の世論調査¹⁾によると、20代の若者は今後の生活において、住生活よりもレジャー・余暇生活を重視している割合が高く、4割以上の人々が重視しているとの結果が出ている。今後、若者をはじめとした人々の生活の質や満足度を向上させるためには、余暇・レジャーの活動機会の提供が重要になってくると考えられる。個々の都市においても活動機会の充実が魅力や経済の向上に繋がり、旅行や出張等での来訪者や流入人口を増加させることができる。特に、地方都市では少子化による人口の自然減に加え、社会減が課題となっており、国をはじめとした多くの機関が地方創生を掲げた取組を行っている。また、昼間だけでなく夜間についても生活行動を考慮していかなければならないという、ナイトタイムエコノミーの概念が広まり、風営法が改正されたことや渋谷区、千葉市でのナイトタイムエコノミー社会実験といった事例が徐々に見られるようになってきた。上述した余暇活動機会について、昼間だけでなく夜間においても充実が必要である。

本研究では、地方都市の一つとして栃木県宇都宮市を対象にし、夜間の余暇行動の充実に向けた考察を行う。現在の宇都宮市の夜間における繁華街来訪者の活動実態と意識を把握し、今後の繁華街の展望を考える上での基礎的なデータを収集することで、現在の繁華街の状況、抱える問題を明らかにする。近年、来街者が増加傾向にある中心部の繁華街と、来街者が減少し衰退傾向にある旧中心部の繁華街、それぞれの実態と意識を把握し、衰退傾向の繁華街については今後の活性化の可能性を探る。夜間の飲酒活動の実態と旧中心部繁華街に対するイメージ、店舗が現状行っている情報発信の内容を把握し、中心部の繁華街と衰退傾向の繁華街での情報発信の違いを確認する。これらを受け、それぞれの繁華街の抱える問題へのアプローチを提言していくことを目的とする。

(2) 既存研究の整理と本研究の位置付け

若者と余暇活動に関する研究として、例えば森本ら²⁾は、首都圏における就業者を対象に、余暇活動の実態と意識に関する調査を行い、若者の地域定着や移住に余暇活動施設数の満足度が少なからず影響を与えていること、個人属性の違いによる余暇活動の頻度、消費金額、活動場所の違いを明らかにしている。菅野ら³⁾は、首都圏を中心とした大学生を対象に、余暇活動の実態と主観的幸

幸福感との関係について調査し、大学所在地による余暇活動実態や意識に違いがあることを示した。また、個人属性の違いやサークル・部活動の所属、アルバイトに対する意識、余暇活動の満足度が主観的幸福感の向上に寄与していることを明らかにした。前田ら⁹⁾は、郊外と都心部の居酒屋の来訪者を対象とした実態調査から、郊外居住者は娯楽目的のトリップ発生率が低いこと、郊外に住む就業者は都心部で娯楽活動を行うことが多いことなどを示した。安森ら¹⁰⁾は、福岡市都心部の夜の繁華街での活動に関するアンケート調査を行い、夜の繁華街での活動を現状よりも増加させたいができない理由として、時間、金銭、体力、家族の制約の存在と程度を確認し、夜の繁華街での活動を増加させる可能性のある複数のシナリオに対する意向を検討した。また、土井ら¹¹⁾は、若者世代における活動の減少傾向が継続すれば、趨勢以上にトリップ数が減少することを確認した。大森¹²⁾は、現代の若者の交通行動の変化について、携帯電話やインターネット等によるICTの影響に着目した考察を行っている。丹羽・大森¹³⁾は、若者カップルに対する4週間のアクティビティ・ダイアリー調査を通して、交際相手とのコミュニケーションの実態と意識を明らかにしている。藤岡ら¹⁴⁾は、東京都市圏パーソントリップ調査データを活用して、若者の交通実態の分析を行っている。日比野・佐藤¹⁵⁾は、既存の複数の統計調査をもとに、近年の若者の余暇時間の増加は、旅行以外の活動に費やされていることを示している。また、日本都市計画学会誌でも、現代の若者の価値観や行動の変化と今後の都市のあり方について特集が生まれ、多方面からの考察が行われている¹⁶⁾。

ナイトタイムエコノミーに関する調査・報告として、木下¹⁷⁾は、ナイトタイムエコノミーの概念を整理し、海外におけるいくつかの都市や地域のナイトタイムエコノミー事例の調査から、ナイトタイムエコノミーの重要性、行政の介入や官民連携での取り組みの必要性を示した。島原¹⁸⁾は、都市の新しい評価指標として「官能都市」という指標を考案し、定量的に捉えられる評価ではない感覚的・観念的な評価による都市の評価を行った。また、これまでの調査や評価の中では触れられてこなかった「夜」の視点を持ち込んだ項目での都市の評価を行った。大森¹⁹⁾は、「住む」、「働く」、「憩う」、「往来する」という4要素を時間軸を考慮してバランスよく配置した都市計画が必要だという考え方にに基づき、Hägerstrand¹⁹⁾の提唱した三種の制約条件について整理し、政策的な視点から夜の都市の諸問題を捉え、夜の時間におけるアクティビティを支える都市・交通施策を提唱した。小泉と飯田²⁰⁾は、機関誌「City&Life」における特集で、ナイトタイムエコノミーについて対談した。地方都市に見られる問題や飲食店街の展望について言及し、

QOL 向上に向けた働き方の意識を変えたナイトライフの可能性についての認識を示した。

以上、既存研究・調査においては、余暇活動の実態を明らかにしたものはいくつかあり、ナイトタイムエコノミーの重要性について言及するものが増えてきてはいるものの、実際に夜の繁華街で来街者がどれだけの消費をしているか、どんな活動をしているのかを明らかにしたものは少ない。そこで、本研究では実際に夜の繁華街で活動を行う来街者を対象に、インタビューおよびアンケート調査を行うことで、現在の繁華街の抱える問題を明らかにすることを、本研究の位置付けとする。

2. 宇都宮市の繁華街の現状

(1) 宇都宮市の繁華街の配置

現在、宇都宮市が第2期宇都宮市中心市街地活性化基本計画¹⁶⁾の中で指定している中心市街地と、これまでの宇都宮市の繁華街を図-1に示す。現在の中心繁華街は③、④の地域が主となっている。①～③の繁華街はJR宇都宮駅から1.5km～2kmに位置し、県外からのアクセスがしやすい。③のオリオン通り商店街内だけでも営業店舗は149店舗であり、ここ数年の様子を見るだけでも、空きテナントに新規出店する店舗が非常に増えている。実際にオリオン通り商店街内の夜間通行量は2017年から2018年にかけて増加している。最も後発の繁華街の④JR宇都宮駅東口エリアの駅前大通り沿いから、後述するインタビューおよびアンケート調査を実施した屋台村までのエリアについても、営業店舗が323店舗、非営業店舗は62店舗と小さなエリアの中で非常に多くの店舗が軒を連ねていることが分かった。

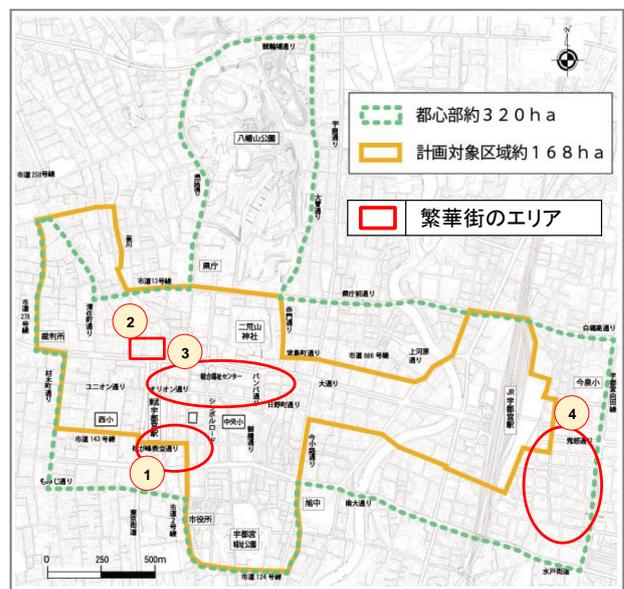


図-1 現在の中心市街地とこれまでの繁華街の分布

表-1 宇都宮市の来歴

1871.11	宇都宮城内に県庁の仮庁舎を開庁.
1872.6.2	県仮庁舎, 西原町安養寺に移転.
1872.8.22	宇都宮城外郭内に建築中の新県庁舎で事務取扱い開始.
1873.6.15	宇都宮県廃止. 栃木県に併合.
1874.4.9	栃木県支庁開設.
1884.1.24	栃木から県庁移転. 河内郡役所(江野町)を仮庁舎に. その後二里山に.
1885.3	宇都宮で大火. 馬場町全域延焼.
1885.7.16	東北本線大宮・宇都宮間開通.
1896.4.1	市制施行. 市域は現在の本庁管内.
1912.4	市庁舎が旭町に落成.
1931.8.11	東武鉄道宇都宮線開通. 松ヶ峰町, 旧刑務所跡に東武電車宇都宮駅開業.
1936.3.31	県庁舎火災により焼失
1938.10.4	新県庁舎竣工.
1954.10.15	市庁舎竣工. 本町に開庁.
1959.11.28	東武宇都宮駅と東武百貨店落成.
1986.10	市庁舎が現在の位置に開庁
1986.12	バブル景気
1991.2	バブル崩壊

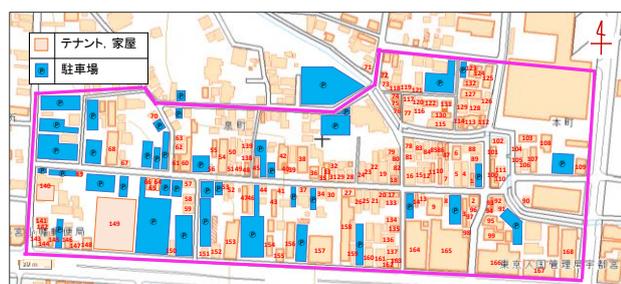


図-2 現在の泉町通り周辺地図

表-2 各繁華街における営業店舗の店舗種別(店舗数)

	I型	II型	III型
②泉町・本町	43	219	31
③オリオン通り商店街周辺	135	27	143
④JR宇都宮駅東側	95	226	13

(2) 各繁華街の歴史の変遷¹⁾

泉町・本町エリアの商店街関係者、自治会関係者等のインタビュー調査から得た情報を、庁舎の配置の歴史の変遷や鉄道駅の開設等の出来事を中心にまとめた年表(表-1)とともに整理する。旧市庁舎が②のエリアのすぐ傍に開庁し、①松ヶ峰エリアにあった繁華街が②の泉町・本町周辺へと移り変わった。その後、1991年のバブル崩壊により、当時の泉町・本町の地域経済を支えていたクラブやキャバレーのような店舗は徐々に経営が困難になった。現在の泉町・本町では空き店舗や空きテナントが非常に多く、駐車場となっている土地も多く見られる(図-2)。全盛期には800店舗近くが経営していたが、現在は274店舗が営業しており空き店舗および非営業店舗が205店舗となっている(平成30年6月某日調べ)。

一方で、東武宇都宮百貨店や東武鉄道の存在もあり、それまで泉町・本町で飲み歩いていた市役所職員などは③オリオン通り商店街周辺で活動するようになっていった。泉町通りは人が減り、空き店舗も多いことからやや暗い印象を受け、治安の悪さから宇都宮市民に負のイメージを抱かせていた。現在の泉町通り沿道の店舗では昔ながらの Snackbar やバーといった店舗がメインであり、店舗経営者、来店客ともに高齢化が進んでいる。

(3) 3つのエリアの店舗種別の特徴

調査対象としたエリアの特色を捉えるために、店舗の種別を大きく3つに分類した。筆者が現地調査の中で見聞きした内容²⁾から、来訪者は一軒目に行く店舗と二軒目以降に行く店舗で感覚や捉え方が違うことが分かった。そのため、ここでは、一軒目に訪れることが多いと考えられる飲食を主目的とする居酒屋や定食屋等の店舗(以下、I型店舗)、キャバクラ、パブ、Snackbar、バーといった、従業員とのコミュニケーションを主目的とした店舗(以下、II型店舗)、その他(以下、III型店舗)と各エリアについて分類した(表-2)。②泉町・本町は二軒目以降に行くような店舗や接待に利用されるような店舗が多いことが分かる。④JR宇都宮駅東側では、II型店舗が多いことに加えI型店舗も②泉町・本町の二倍の数があり、④のエリア内だけで所謂ハシゴができるような構図になっているように感じられる。③オリオン通り商店街内では、物販店をはじめとするIII型店舗が最も多く、次いで居酒屋やレストラン、カフェといった若者受けの良い店舗が多く、II型店舗についてもお洒落なバー等があるといった状態であった。

3. 夜間の繁華街来訪者の実態調査

(1) 実態調査の概要

本調査では、夜間の飲食店利用者の活動実態を把握するため、屋台村等の飲食店の集合した箇所実際に面接インタビュー、記入を承諾した人には調査票を配布回収、その場での記入を断った人には郵送での回収という形で調査を行った。調査概要を表-3に示す。本調査では宇都宮市内の繁華街のうち、3か所での配布・回収を行った。調査対象は、JR宇都宮駅東側の屋台村(以下、東側エリア)、JR宇都宮駅西側の屋台横丁(以下、西側エリア)、泉町・本町(以下、泉町エリア)を選定した。それぞれの宇都宮市内における位置を図-3に示す。回答者の多くは男性であり、年齢は西側エリアで約65%が30代以下であり、若者が多く飲みに来ていることが分かった。一方で泉町エリア来訪者の8割が40代以上であり、現中心繁華街に比べ客層が高齢であるということが分かる。

表-3 アンケート調査の概要

調査方法	調査票直接配布回収、郵送での回収
調査日	H30年3月の金曜と土曜
調査対象	宇都宮市における夜間の繁華街来訪者
サンプル数	551名
調査項目	<ul style="list-style-type: none"> 個人属性（性別、年齢、職業、居住地、勤務地） 余暇活動の現状（飲酒頻度、一ヶ月の自宅外飲酒の消費金額、誰と飲みに来たか、そのエリアで飲酒をしている理由、帰宅時の交通手段） 旧繁華街の泉町・本町エリアに関する項目（泉町・本町に対するイメージ、今より明るくなれば来訪頻度が増えるか、車両通行止めの解除により来訪頻度が増えるか、その他自由意見）



図-3 調査対象エリアの分布

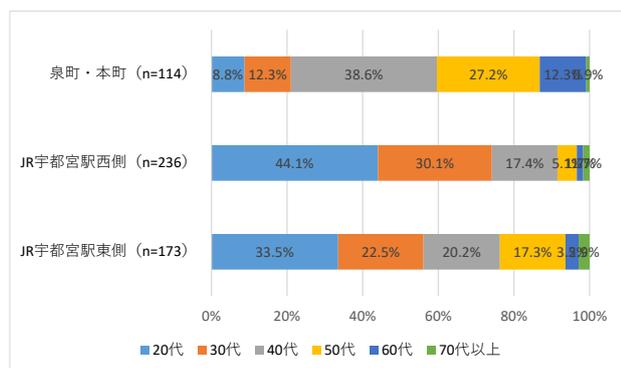


図-4 調査票回収場所別の年齢

(図-4). また、居住地を回答した478名のうち68%にあたる325名が宇都宮市内、勤務地を回答した416名のうち62%にあたる258名が宇都宮市内であった。回答者の職業の多くは会社員であったが、その中でも技術系が最も多かった。特に、JR宇都宮駅東側は技術系会社員が多く利用しているという実態が分かった。

(2) 夜間の繁華街来訪者の活動実態

宇都宮市内の繁華街で夜間の活動を行う人全体の傾向として、約6割が月に1万円以上を自宅外の飲酒活動に使っており、帰宅時は公共交通が運行していない時間となるため、運転代行やタクシーを利用する人が多かった。泉町・本町の地元住民から挙げられていた問題点である、街灯が暗い、車両が侵入できないことについて、明るくなったり車両が侵入可能になりタクシーが店舗前で乗れば、来訪意向が高まること分かった。特に、既に泉町でよく飲んでいる人は、明るくなれば来訪意向が高く

なることが分かった。年齢別の1ヶ月の飲み代は、年齢が高くなるほど金額も高くなる傾向が見られた。

それぞれの地域に飲みに行く頻度は、西側エリアに飲みに行く頻度が最も高く、回答者の半数近くが月に1日以上は飲みを訪れていることが分かる(図-5)。泉町エリアについては「行かない」と回答した人が37.6%と非常に高く、旧中心繁華街に行く人が非常に少なくなっていることが分かる。泉町に対するイメージについては、行きつけの店がないことと同程度で、どんな店があるか知らないという回答が多く、40歳未満の若い世代には認知度が低いことが原因であると考えられる。次いで、職場や自宅からのアクセスの悪さが高く、仕事の付き合いで行く、高級、一軒目に行く場所じゃないといった泉町特有の項目も高い割合を示した(図-6)。次に、1ヶ月での飲酒頻度が最も高いエリア別の年齢の違いを図-7に示す。泉町エリアと東側エリアが同数で最も頻度が高い場合は【泉町・東側】と示す。【西側】や【西側・東側】を見ると、西側エリアで活動しているのは若い世代であり、【泉町】や【泉町・東側】のような泉町エリアに行きつけの店がある人や、接待等が多い世代は年長であると分かる。金曜と土曜では共に飲みに行く相手が異なり、金曜は仕事関係、土曜は友人と活動することが分かった(図-8)。また、活動エリアの選択理由についても、金曜は職場からの距離を意識し、土曜は行きつけの店に行く人が多いことが分かっている。

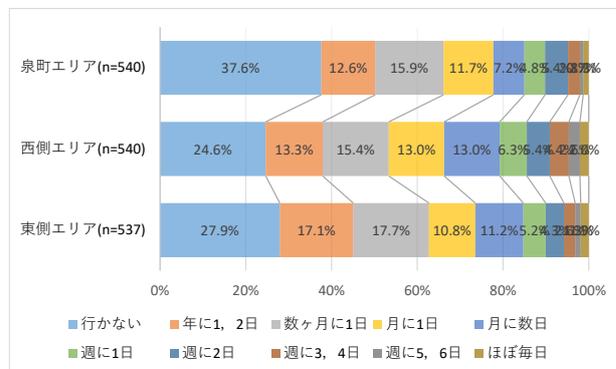


図-5 3つのエリアに飲みに行く頻度

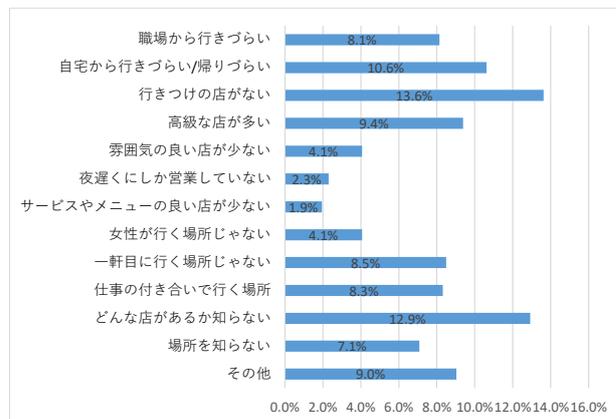


図-6 泉町・本町に対するイメージ (複数回答可) (n=262)

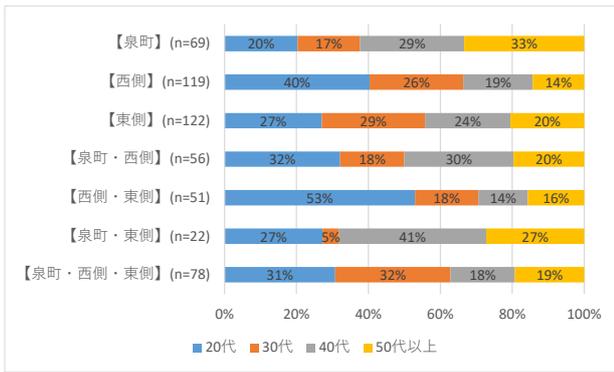


図-7 頻度分類別の年齢

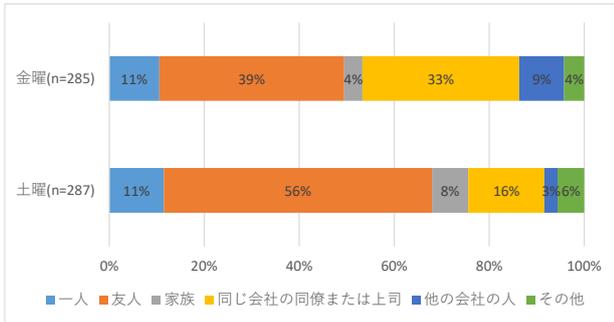


図-8 曜日別の誰と一緒に

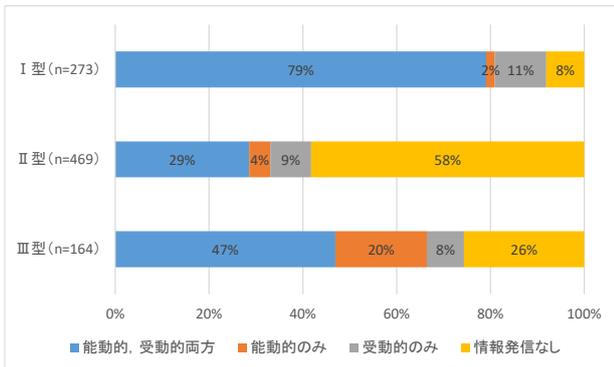


図-9 店舗種別と情報発信の有無

4. 調査から得られた情報発信の必要性

(1) 情報発信の必要性と店舗の現状における情報発信

調査結果より、改めてJR宇都宮駅西側の屋台横丁が若い世代に利用されており、JR宇都宮駅東側の屋台村も同様に生産年齢人口が集中していることが明らかになった。泉町・本町エリアは来訪者の高齢化が顕著に表れており、JR宇都宮駅西側来訪者でも認知していない人が多かった。実際に、店舗種別とWeb上での情報発信が能動的、受動的いずれかでされているか否かを見ると、II型の発信が少なく、泉町エリアの情報発信不足の裏付けとなっていた(図-9)。認知度の低さ、イメージの悪さが現状のままであればさらなる衰退、将来的には繁華街の消滅が想定される。地元の人たちへのインタビュー調査の中でも、

泉町・本町エリアの情報がWeb上に少ないことが問題に挙げられ、商店街や横丁等が運営しているようなHPが必要だという声があった。そのため、本研究において、現状の泉町エリアの情報発信の場としてHPの作成を試みる。これにより、オリオン通り商店街周辺からの回遊の可能性を高められると考えている。

(2) HP作成

サイト作成にあたりサイトコンセプト決定過程のSWIHに基づき、「泉町・本町を知る人にはさらに、知らない人には魅力を発信する場」をサイトコンセプトとした。サイトマップはオリオン通り商店街HP¹⁷⁾を参考にし、店舗情報、泉町紹介、交通アクセス、FAQ、泉町活性化団体の紹介といったページを作成した(図-10)。図-7で明らかになった泉町・本町に対するネガティブなイメージの対策をHPに組み込んだ。例えば、職場、自宅から行きづらい帰りづらいという意見に対しては、東武宇都宮駅から近いこと、JR宇都宮駅や各繁華街からのアクセス、終バスの情報を示した。

作成したサイトを泉町活性化に向けた協議が行われている場で、活性化団体のメンバーに閲覧してもらったところ、店舗種別をより細かく表示する機能、店舗側が記事を投稿する機能、泉町らしさが伝わるデザインや特徴が欲しいといったコンテンツの拡充に関する意見が出た。

5. おわりに

本研究では、栃木県宇都宮市の現存する繁華街を対象に、夜間の繁華街来訪者の活動実態と意識を把握し、それぞれの繁華街をどのような人がどのように利用しており、どんな意識を持っているかを分析した。特に、衰退が激しい泉町・本町繁華街については、昔のまちを知る人へのヒアリング調査を行うことでどのように盛隆し、衰退していったかを把握した。これらの調査を経て、オリオン通り商店街周辺の繁華街、JR宇都宮駅東側の繁華街は近年の活性化の傾向が見られる一方で、泉町・本町繁華街についてはネガティブなイメージを持っている



図-10 作成したサイトのトップページ

人や活性化に期待を抱いている人が多いことが分かった。店舗調査の結果より、各繁華街の店舗種別の割合が異なり、それぞれに特徴を持っていることが明らかになった。特にオリオン通り商店街周辺は一軒目、泉町・本町は二軒目以降に行くという機能の違いが見られ、オリオン通り商店街周辺で活動する人に対して、泉町・本町への回遊を促すことが有効だと考えられる。また、本研究の出来得る対策としてHPの作成を掲げ、現在の来訪者に閲覧してもらうことで今後の泉町・本町来訪を促すHPの改良に関する項目が整理できた。

今後の課題として、インタビューおよびアンケート調査では各繁華街間を回遊する人が見られたが、回遊についての調査項目を設けなかったため、各繁華街間の移動やどんな店舗にハシゴするかといった詳細な情報を得られなかった。泉町・本町への回遊の詳細を把握することは特に大きな意味を持つため、限られた時間の中での調査を有効に行う手段を模索する必要がある。また、今回の調査では実際に飲酒活動を行う人を対象に行ったが、来訪者を増加させるためには現在来訪していない人を対象にする必要があるため、今後の課題としたい。店舗種別の割合のように定量的なデータから繁華街を評価し、他都市や他繁華街との比較を行うことや、同様の施策が有効であるといった議論ができると良いと考える。最後に、HP作成は本研究で提案できる一つの手段として挙げたが、今後は夜間の通行止め対策、街路環境、景観対策等についても検討を進めていく必要がある。

謝辞：本研究は、日本交通政策研究会(研究代表者：大森宣暁、課題名：少子高齢社会における夜の生活活動を支える都市と交通のあり方に関する研究)、および科学研究費補助金(基盤A)(研究代表者：張峻屹、課題名：地方都市への若者の移住・定住促進策に関する学融合研究、課題番号：15H02271)の助成を受けたものである。また、インタビューおよびアンケート調査の実施にご協力頂いた、宇都宮まちづくり推進機構様、株式会社シー・アイ・エス様、泉町本町飲食街振興会小島様、株式会社村上の村上様、東口屋台村様、宇都宮の繁華街の歴史調査の際に情報提供していただいた各自治会様、宇都宮市広報広聴課様に、ここに記して謝意を表す。

補注

- [1] 史実については、宇都宮市HP、宇都宮市史、栃木県土木史、繁華街関係者や自治会関係者に対するヒアリング調査の内容を整理した。
- [2] 特に仕事帰りの人や40代以上の繁華街来訪者は、所謂ハシゴをすることが常習化しており、飲食を居酒屋で済ませた後にII型店舗に行く回遊をしていた。それぞれの店舗に求める要素も違うことも分かったため、分類した。

参考文献

- 1) 内閣府大臣官房政府広報室：今後の生活の力点、国民生活に関する世論調査、2014。
- 2) 森本瑛士、大森宣暁、菅野健、長田哲平：若者の余暇活動の実態と意識—地方都市への地域定着を視野に入れて—、土木学会論文集 D3 (土木計画学)、Vol. 73, No. 5, pp. I_537-I_547, 2017。
- 3) 菅野健、大森宣暁、長田哲平：大学生の余暇活動と主観的幸福感、土木学会論文集 D3 (土木計画学)、Vol.74, No.5, pp.I_809-I_816, 2018。
- 4) 前田敬、福井賢一郎、北村隆一：郊外居住に着目した公共領域での娯楽活動に関する考察、土木計画学研究・講演集、Vol. 26, CD-ROM, 2002。
- 5) 安森溪太郎、高見淳史、大森宣暁、原田昇：夜の繁華街における活動実態と時間制約緩和策が与える影響、土木計画学研究・講演集 39, CD-ROM, 2009。
- 6) 土井勉、安東直紀、白水靖郎、中矢昌希、西堀泰英：人生前半のアクティビティとモビリティの課題～若者世代(20～30歳代)の活動減少から見た社会問題に対する一考察～、土木計画学研究・講演集、Vol. 50, CD-ROM, 2014。
- 7) 大森宣暁：若者の交通行動に関する一考察—ヴァーチャル・モビリティに着目して—、IATSS Research, Vol. 37, No. 2, pp. 100-104, 2012。
- 8) 丹羽由佳理、大森宣暁：若者カップルのコミュニケーション行動に関する研究、都市計画論文集、Vol. 41, No. 3, pp. 247-252, 2006。
- 9) 藤岡啓太郎、石神孝裕、高橋勝美：東京都市圏における若者の交通実態に関するマクロ分析—特に女性のライフステージに着目して—、IATSS Research, Vol. 37, No. 2, pp. 115-122, 2002。
- 10) 日比野直彦、佐藤真理子：若者と旅—若年層の国内観光行動の時系列分析—、IATSS Research, Vol. 37, No. 2, pp. 142-150, 2002。
- 11) 特集：ミレニアルズと都市、都市計画、Vol.66, No.3, pp.8-72, 2017。
- 12) 特集：まち×夜、新都市、Vol.72, No.5, pp.7-12, pp.17-22, 2018。
- 13) 大森宣暁：若者の交通行動に関する一考察—ヴァーチャル・モビリティに着目して—、IATSS Research, Vol. 37, No. 2, pp. 100-104, 2012。
- 14) Hägerstrand, T: What about people in regional science?, Papers of the Regional Science Association 24, pp.7-21, 1970。
- 15) 特集：夕方からのまちづくり、city&life 都市のしくみとくらし、No.121, 2017-2018。
- 16) 宇都宮市：第2期宇都宮市中心市街地活性化基本計画(概要版)パンフレット、2015。
- 17) 宇都宮オリオン通り商店街振興組合：オリオン通り商店街 (<http://www.orion.or.jp/index.html>)

(2019. 3. 10 受付)